

「4度の流産の原因となった腺筋症を克服しました」

友利弘子（39歳）

「腺筋症は手術で治る」と呼びかけた

昨年11月、那覇市主催の女性セミナーで、子宮筋腫と腺筋症（内性子宮内膜症）をテーマにした講演会が開かれました。会場には若い女性を中心に50人ぐらいいは集まったでしょうか。定員をはるかに上まわる盛況でした。それだけ子宮の病気に悩んでいる若い人が多いのだと思いました。

このセミナーで演壇に立った婦人科の女医先生は「腺筋症の治療法はホルモン剤を使ったものが中心で、手術では再発や癒着が起こる可能性が高く、妊娠を希望する女性に対しては施していない」と話しました。子宮筋腫の治療法についても、筋腫が小さいうちはホルモン療法が効果的で、核出手術によってある程度取り除くことはできるが、その場合は再発するケースも多いというお話でした。

講演のあとの質疑応答で、私は手を挙げました。「さきほどのお話では、妊娠を希望する女性に対しては腺筋症は手術ができない、治らないとのことでしたが、私はつい数カ月前、広尾メディカルクリニックという病院で、腺筋症の病変部分を取って子宮は残すという子宮保存手術を受けてきました。この病院では重症の腺筋症や子宮筋腫の患者に子宮保存手術を施していますが、術後に100例を超える出産が報告されています。私自身も妊娠を希望していますし、痛みともものすごい出血に悩まされていた日々からようやく解放されて、とても元気になりました。腺筋症は手術で治るんです。今日はその手術の経過などを記録したファイルを持っていますから、ご覧になりたい方はどうぞ見に来てください」と呼びかけたのです。

セミナーが終わると、私の回りには数人の人が集まり、「その病院を教えてください」という人や、広尾の電話番号を手帳に控える人もいました。さきほどの女医先生も熱心にファイルに目を通していました。

初潮の時から始まった生理痛

私が広尾を知ったのは、手術のほぼ2カ月前の昨年6月24日です。主人がインターネットの検索ページで広尾のホームページを見つけて、「こういう病院があるよ」と教えてくれたのです。その時、私達は出口の見えない長いトンネルの中でどう前に進んだらいいのかかわからない状態にありました。私達、と書いたのは、腺筋症と闘ってきたのは私一人ではなく、常に主人が私の苦しみを受けとめて一緒に解決の方法を探し続けてくれたからです。主人の支えがなければ、こうして苦しみの果てに斎藤先生に出会うことはなかったと思います。

結婚4年目に初めての妊娠で流産したあと、流産を繰り返して、6年の間に9カ所の病院や漢方医を転々としていました。流産には必ず何らかの原因があるといわれますが、私の場合は腺筋症がその原因のひとつではないかといわれていました。もっとも、腺筋症との診断がついたのは2回目の流産のあとで、それまでは「子宮筋腫があるが、それほど大きくないので様子を見ましょう」といわれていたのです。

「子宮筋腫がある」と最初にいわれたのは、結婚3年目に激しい下腹痛で婦人科を受診した時でした。医師は「数センチの大きさの筋腫ができていますが、これが腹痛の原因とも思えない。子宮にばい菌が入ったのかも知れない」と言って抗生物質を処方してくれました。

下腹痛はその時が初めてだったわけではなく、生理時の下腹痛や腰痛は毎月のもので、思い起こせば中学生で初潮を迎えた時から下腹痛や腰痛は決して軽くはありませんでした。高校時代には生理になると学校を2、3日休んでしまうほどでしたから、母が心配して婦人科に連れて行ってくれたことがありました。その時は「子宮の発育不全によるもの」との診断だったと記憶しています。

しかし、大学生となり、社会人となり、結婚してからも、生理時の下腹痛や腰痛は相変わらずで、むしろ少しずつ症状は重くなって、結婚3年目に激しい下腹痛で再び婦人科へ駆け込むことになったのです。

2年間に4度の流産

結婚4年目から6年目にかけての2年あまりは、辛く悲しいことが重なりました。



初めての妊娠を5カ月足らずで流産したあとに、腹痛や微熱がおさまらず、耐えられずに1カ月後に大学病院で受診したところ、なんと掻爬しきれなかった組織が子宮の中に残っていたということもありました。これが原因でいつまでも腹痛や微熱や悪露（おろ）が続いていたのです。

その時の大学病院の先生は「よく1カ月も我慢していたね」と気の毒がってください、流産のあとの妊娠についても親身に相談に乗ってくださいましたが、その後もほぼ半年ごとに妊娠しては流産し、2年間に4回の流産を経験することになってしまいました。度重なる妊娠と流産に、期待と落胆が交差する日々のなかで、妊娠がわかった時には「今度こそ、しっかりお腹の中にいてね」と毎日お腹の赤ちゃんに話しかけていました。

流産の悲しさ、切なさ、自責の思い。これは経験した女性にはわかっていただけだと思いますが、4度目の時はただただ涙があふれて、泣き続けました。主人も泣いていました。

スプレキュアで体調が悪化

大学病院で「流産の原因はおそらく子宮筋腫があるため。筋腫だけでも取り除いておきましょう」と手術を勧められた時には、これで流産を繰り返さずに済むと思いホッとしたものです。

ところが、術前の検査も終わって、あとは手術を待つばかりという時になって、病院から電話があり「検査の結果は子宮筋腫ではなく腺筋症だった。腺筋症は手術をしても癒着が起こり、ますます不妊の原因になると思われるので、手術は取りやめます」とのこと。また落胆の底に突き落とされたようでした。

治療に通っていた6年あまりの間に、この大学病院を含めて2つの病院で手術が検討されましたが、結局はどこでも「手術は無理」とのことでホルモン治療を受けることになりました。スプレキュアを半年単位で3回、合計すると1年半使いましたが、スプレキュアをやめると出血量は以前にも増して多くなり、腹痛や頭痛などもひどくなりました。ものすごい出血量なので貧血も進んでしまい体調は最悪でした。

「完治は子宮全摘以外にない」と言われて

ホルモン療法に頼ってはい身体がダメになると思い、漢方や食事療法など効果がありそうなものには取り組んでみたのですが、あまりはかばかしい結果は得られませんでした。

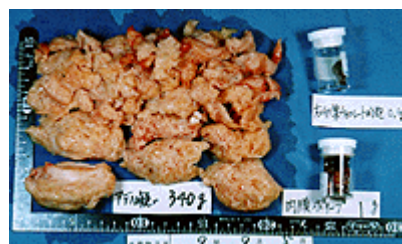
その頃私を悩ませていた症状のひとつがおりもので、水のようなおりものがシャーシャーと流れ出ることがよくあり、大学病院で「おりものがひどいんです」と訴えましたが、医師は「そんなに心配する必要はないと思いますよ」とあまり真剣に受けとめてはくれませんでした。

婦人科の権威の先生がいるという県立病院にも行きました。広尾で手術を受ける約1カ月ほど前、ここの不妊科を訪れ、ホルモン治療で体調が悪くなった経緯を話した上で腺筋症の治療法を聞いてみましたら、「その病気を治したかったら子宮全摘以外にないよ。子どもがほしかったら、今までと同じ治療しかない」とハッキリ言われました。

明るい見通しが何ひとつない状態で、これから先、いったいどういう治療を受ければいいのかの...。暗い思いに閉ざされていた時、私達はインターネットで広尾のホームページに出会ったのです。

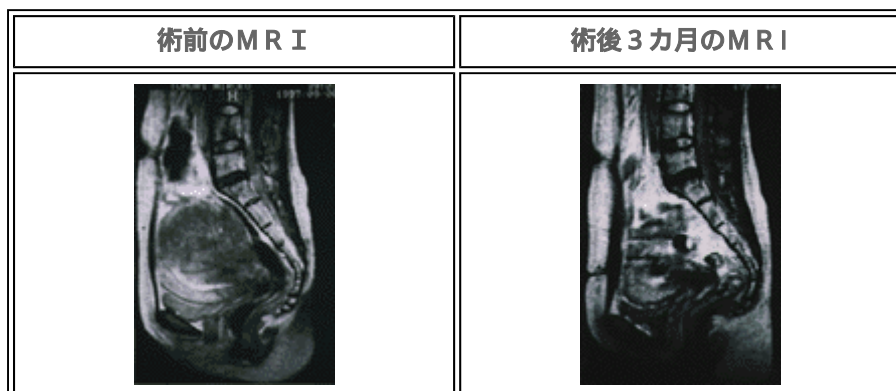
貧血の治療、そして手術

ホームページを読んで、「ここで手術をしていただく」と心を決めるまで時間はかかりませんでした。さっそく手術の申し込みをし、こちらの病院で検査したデータを送りしたところ、「貧血がひどいので、このままでは手術できません。術前に輸血をして正常値に戻しておく必要があります」とのご連絡をいただき、手術に先駆けて鶴見の佐々木病院に入院し、輸血を受けました。ここは広尾の術前・術後の検査を引き受けている病院ですが、入院中に斎藤先生が訪ねてきてくださり、いろいろなお話を聞かせてくださったので、手術に対する不安を感じることなく手術日を迎えることができたのはとても幸せなことでした。



手術で摘出された腺筋症の病変部分は341グラム。手術後に、これまでどこの病院でも「手術はできない」と言われていたものが、こうして摘出されたという事実を目の当たりにして、先生の技術力のすごさに感謝せずにはいられませんでした。

腺筋症は手術で治るのです。このことを、ぜひ多くの女性に知ってほしいと思います。術後5カ月が過ぎて、生理時の出血量は手術前の4分の1ほどになり、生理痛もほとんどなく、本当に元気になりました。腺筋症のために辛く悲しい結果となった4度の妊娠が、今度こそ喜びに満ちたものになりますようにと祈りながら、妊娠する日を待っています。



	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球 (RBC)	415	514
ヘマトクリット (Ht)	25.0	45.4
血色素 (Hb)	6.3	14.8
CA-125	250	40
備考	摘出物：341gm 病理：腺筋症 (Adenomyosis)	

「スプレキュアを使っても腺筋症は治らなかった」

大森真美子（45歳）

大学病院なら大丈夫だろう、と

生理痛が強くなり始めたのは平成2年の4月頃でした。その時は、子宮に病気があるなんて考えもせず、あくまでも「生理に伴う痛み＝生理痛」だと思っていました。もともとが病気知らずで丈夫な方だったので、痛いとか出血の量が多いといった生理の異常を異常と感じなかったのです。

もしかしたら病気かもしれない、と思い始めたのは、その年の暮れにちょうど生理中に買い物に出かけて、貧血で倒れてしまうという出来事があってからです。生理痛も強くなる一方だし、貧血で倒れるなんて、やっぱりどこか悪いのかもしれない、と。

年が明けて間もない平成3年1月から、順天堂大学病院に通い始めました。順天堂を選んだのは、大学病院なら間違いなだろうと思ったこと、順天堂の婦人科にはいい先生がいると聞いたこと、会社から通いやすい場所にあることなどの理由によるものですが、何回か通ううちに「大学病院ってこんな所なのか…」と感じるところも多くありました。

一人の医師が一日に何十人もの患者を診るのですから、そうなるのも無理はないのですが、医師は患者の顔を見るでもなくカルテに視線を落としたまま必要なことだけを告げて診察はおしまいです。

何ヵ月かたって、MRIの検査結果を聞きに行ったときも、婦人科の権威といわれている先生は、タバコをプカプカとくゆらせ、MRIの画像を見ながら「こぶし大の筋腫ができています。手術ですね」と言われ、「詳しいことは先生に聞いてください」と言いました。

「手術ですね」という言葉に驚いて、「子宮を残したいのですが」と言うと、「開けてみなければ、残せるかどうかはわかりませんよ。もしかしたら、取ることになるかもしれません」という返事。頭の中が真っ白になる、という表現がありますが、まさにそのときの私は驚きとショックで頭の中が真っ白になってしまい、何も考えられない状態でした。

その足でJ医大へ

検査の結果を聞きに付き添って来てくれた姉が、機転をきかせて「手術が必要ということなら、実家のある北海道の病院でしますから」と、病院を出てから電話をしてくれました。

姉も少なからず動揺していたのでしょう。順天堂を出ると、「本当に手術が必要なのかどうか、ほかの病院でも診てもらおう。今ならまだ午前の診察時間に間に合う」と言ってタクシーを止め、私たちはその足でJ医大病院に向かいました。J医大を選んだのも、婦人科の医療に定評があると聞いていたからです。

J医大では、順天堂に通院していたこと、たった今「手術ですね」と言われたことなどを包み隠さずに話しました。今にして思えば、そこまで正直に言うこともなかったかなと思いますが、順天堂で「もしかしたら取ることになる」と言われたショックが大きかったのでしょう。

J医大の女医先生は、診察した結果、「右側にタマゴ大の筋腫があるが、すぐに手術することはないと思いますよ。しばらく薬で様子を見ましょう」と言いました。

スプレキュアを長期間使用

「医大でスプレキュアを使ったホルモン治療が始まったのは、」医大に通うようになって3年目のことです。それまでは、ほかのホルモン剤を処方されていたように記憶しています。

スプレキュアを3カ月使って3カ月休む、という治療が始まりました。スプレキュアを使用している期間は2週おきに通院して、そのつどエコーで筋腫の大きさを確認し、肝機能検査をしました。スプレキュアの副作用については、「ほてり」が出るかもしれないこと、肝臓に負担がかかることについては説明を受けましたが、一般に言われている骨粗しょう症になりやすいことについては何も聞かされませんでした。

実際にスプレキュアを使い始めると、説明で聞いた通り「ほてり」を強く感じるようになり、それを抑える漢方製剤をもらって服用していました。

もうひとつ、スプレキュアを使うようになって変わった点といえば、虫歯がとてもできやすくなったことです。小さな虫歯が次々にできて、頻繁に歯科医に通いました。歯科医には子宮の病気でホルモン剤を使っていることを話しましたが、歯科医によれば「ホルモン剤と虫歯との医学的な因果関係はない」とのこと。でも、スプレキュアによって骨粗しょう症になりやすいのだとしたら、虫歯とも関係があるのではないかと考えるのは素人考えでしょうか。

スプレキュアを使い始めてしばらくするとたしかに筋腫は小さくなり、「医大の先生は「これはいいですね」と言って、スプレキュアを続けてみることになりました。おそらく、私の場合、副作用が「ほてり」程度だったこと、それも漢方製剤によって症状を抑えられたことが、スプレキュアの使用を長期化させる結果になったのだと思います。なにしろ、平成5年頃から平成8年まで、かれこれ2年半近くスプレキュアを使うことになったのですから。

最後には「やっぱり手術ですね」

しかし、スプレキュアを使っている間も、生理痛も出血の量も軽くはなりません。というより、生理中の痛みはますます強くなって、出血に混じってレバー状の塊が出る量も多くなりました。夜は海老のように身体を丸めて、下腹部をギュッと押しながら寝ました。こうすると、少し痛みがやわらぐのですが、とにかく出血の量がすごくて、寝ている間に寝具を汚してしまいそうで、夜中に何度も目がさめたものです。

こんなふうにスプレキュアを使い続けて何年か経つうちに、診察のときに「医大の先生は「このままスプレキュアを続けますか」と、私に判断を委ねるようになりました。今にして思えば、スプレキュアの長期連用を危惧してのことだったのですが、スプレキュアで筋腫が小さくなるとばかり思っていた私は、あえて中止するほどの決断もつかず、相変わらず「医大に通っていました。

そして、平成8年の夏、いつものようにエコーで筋腫の大きさを確かめ、肝機能検査をした後で、先生は「もう、これ以上スプレキュアは使えませんね。筋腫も8センチほどになっているので、手術した方がいいですね」と告げました。

ここでも私は「子宮を残したいんです」と言いました。それに対して、先生は「残しておいても、悪くなった場合には再手術ということになってしまうから、悪いところがある子宮の半分を取ってしましましょう」と答え、私は、ああやっぱり取ることになってしまうのか...と、すっかり落ち込んでしまいました。

「子宮は残せる」を信じた

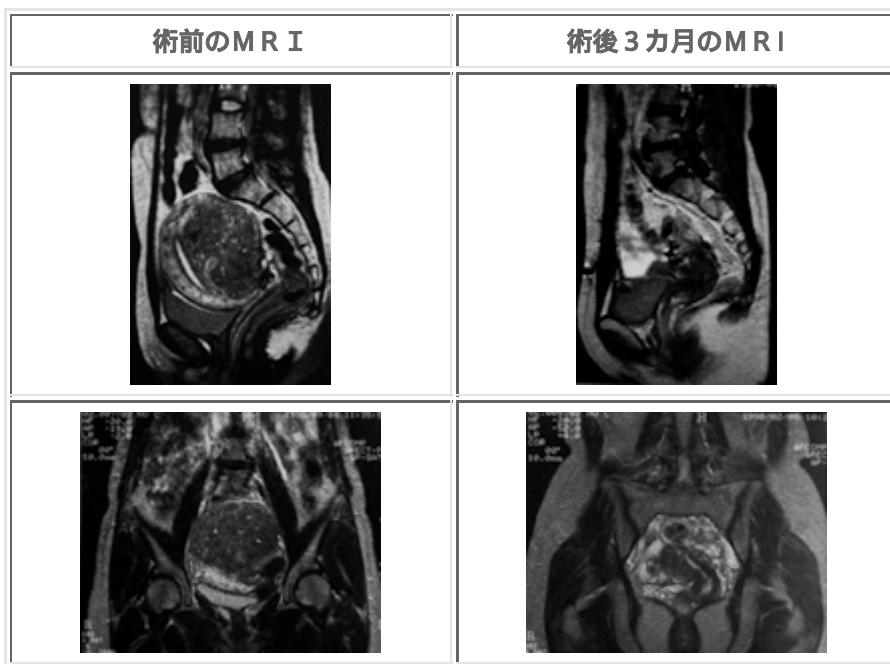
広尾のことを知ったのは、平成8年の5月頃、家の近くの市立図書館で『子宮をのこしたい10人の選択』を手にしたのがきっかけです。題名が私の気持ちそのものだったので、2回続けて借り出し、何度も何度も読みました。レーザーメスを使った手術がどのようなものなのかははっきり理解できませんでしたが、現実に子宮保存手術を手がけている病院があることを知って、希望がわいてきました。



本のカバーに書いてあった電話番号に電話してみると、鶴見に移転したとのこと。鶴見といえば、私の住んでいる川崎の隣町です。急に希望が叶いそうな気がして、広尾で診察を受けることに迷いはありませんでした。

斎藤先生は「筋腫もあるけれど、腺筋症のほうがずっと重症。でも、手術で治せるし、子宮もちゃんと残せるから大丈夫」とおっしゃいました。これまで大学病院では「取る」としか言われなかったのに、斎藤先生は「大丈夫。残せる」とおっしゃった。この違いは天国と地獄ほどの差だと思い、思わず涙があふれました。

広尾で手術を受けようと決断したのは、斎藤先生の「手術で治るし、子宮も残せる」という言葉を信じたことができたから。手術や入院に要する費用はたしかに多額だけれど、6日間の入院とその後1週間の自宅療養で健康な子宮を取り戻すことができたのですから、これはお金には代えられないことだと今でも思っています。



	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球 (RBC)	328	417
ヘマトクリット (Ht)	28.2	38.5
血色素 (Hb)	8.8	13.0
CA-125	500	67.0
CA-19-9	490	77
備考	摘出物：335gm 病理：腺筋症 (Adenomyosis) 良性 NO malignancy	

「腺筋症を手術して1年半、今、妊娠7カ月です」

腺筋症を克服しての妊娠

今週から妊娠7カ月目に入ります。先日、斎藤先生にエコーで診ていただいたら、赤ちゃんは男の子ということでした。月数のわりにはお腹が大きくて、「もうすぐ？」と近所の人に聞かれるほどです。

根が楽天的なせいも、腺筋症で手術したあとも普通に妊娠できるものだと思っていたので、今回の妊娠も私たち夫婦にとっては予定通りのことだったのですが、現在かかっている産院の先生やみなさんから「腺筋症を手術で治して、妊娠した例はとても珍しい」と言われて、かえって驚いてしまいました。手術のあとで斎藤先生に「術後、生理が普通にくるようになれば子供をつくっても大丈夫」と言われていたので、手術を受けて腺筋症が治ってよかった、と単純に思っていたのですが、斎藤先生からも「腺筋症の患者が術後、妊娠したケースは他に報告がないほど貴重なケース」と聞かされて、改めて先生に感謝するとともに、お腹のなかですくすくと育っているこの生命を大事にしなくてはと思っています。



最初の妊娠で病気を知る

今回の妊娠は、実は2度目です。最初の妊娠は結婚して4、5カ月がたった頃で、生理の遅れが気になって妊娠試験薬で確かめてから、近所の開業医に行きました。エコーで診ていただいたら、「筋腫がありますね。こういう場合は妊娠の継続がむずかしいので、この妊娠は大切にしたいほうがいいですよ」とのことです、びっくりしてしまいました。

これまで子宮に病気があるなどと疑ったこともありませんでしたし、生理痛が特別強いという自覚もありませんでした。ただ、手術してから振り返ると、出血にレバー状のものが混じっていたり、出血が多かったという点では、やはり正常の生理ではなかったと思います。開業医の「この妊娠は大切にしたいほうがいいですよ」という言葉に衝撃を受けて、大きな病院できちんと検査を受けて流産しないようにしなくては...と、さっそく東京医大病院にかかることにしました。東京医大での初診では、エコーに胎児は映りましたが心音は確認できず、「3週間後にまた来てください」と言われました。そして、2度目の診察日、やっぱり心音は確認できませんでした。

ところが、病院から帰宅したその日に出血。あわてて病院に戻り、そのまま入院となりました。流産の始まりのようでした。結局、数日後に流産は決定的となり、掻爬手術を受けることになりました。

効くという健康食品にも頼った

私が真剣に病気と向き合ったのは、この流産がきっかけでした。最初に行った開業医の「筋腫がある人は妊娠しにくい」という言葉がまたしても思い出されて、なんとかしてこの病気を治さなくては、と流産から3ヶ月ほどして東京医大でMRIの検査を受けました。

筋腫に効くと言われるものは何でもやってみよう、民間療法をあれこれ試してみたのもこの頃です。モグラの黒焼きの粉末が効くと勧められて、4ヶ月ほど飲んでみました。東京でモグラの黒焼きを扱っているのはここ1軒という神田のお店で、ご主人のおばあさんは「筋腫なんかモグラの黒焼きですぐに治ってしまう」と言っていました。後になって広尾に初めて行ったときに、その週に手術した患者さんの筋腫を見せてもらい、「こんなに硬いものがモグラの黒焼きなんかで治るわけないなあ」と思ってしまいました。

モグラの黒焼きをはじめ健康食品だけで、ひと月に4、5万円は使ったでしょうか。そんな日々のなかでも、広尾のことはずっと頭の片隅にありました。ずっと前に朝日新聞で紹介されていた「レーザーメスを使った子宮保存手術」の記事と、その病院が「広尾クリニック」という名前だったことを覚えていたのです。「たしか、子宮

筋腫の駆け込み寺って書いてあったなあ」と記憶の糸をたぐりよせて、そこに行けばなんとかなりそうな気がしていたのです。

「広尾？マユツバじゃないですか」

東京医大での診察のときに、担当医に「広尾クリニックってご存知ですか？」と聞いたことがあります。ちょうど私と同年齢のその医者は「広尾？名前は知っているけど、マユツバじゃないですか」と答えました。このときの担当医の口ぶりに不信感をもった私は、やっぱり広尾に行こう、と心に決めました。

そして、主人とともに図書館や本屋をあちこち廻って、広尾についての情報を探し出し、ようやく手にしたのが齋藤先生が書かれた『子宮をのこしたい』の本だったのです。

東京医大で撮ったMRIの画像を持って初めて広尾で診察を受けたとき、齋藤先生は画像を見ながら「腺筋症ですね。でも、手術で治せるし、子宮の機能もちゃんと残せます」とおっしゃいました。筋腫だと思っていた私には腺筋症と筋腫がどのように違うものなのかはよくわかりませんでした。病気の診断と解決法がはっきりした以上、早く手術して治したいと思いました。

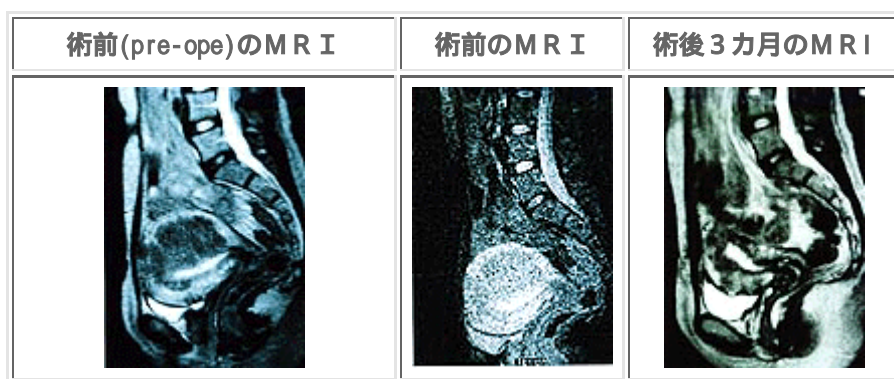
広尾の患者さんの多くは、齋藤先生にたどり着くまでにあちこちの大学病院を転々とし、何年も回り道をして、その結果、病気が重症化してしまうと聞いたことがあります。

私の場合は、モグラの黒焼きを試してみたりという回り道はありましたが、広尾のことを断片的にしる記憶していたことで、短期間のうちに齋藤先生にたどり着けたのは幸せでした。

齋藤先生に続く医者が出てほしい

手術をしたのは、ちょうど2年前の4月8日。摘出したのは75グラムで、やはり腺筋症でした。「将来の妊娠に備えて、内膜に傷をつけないように腺筋症の病変部分を全部取り除いた」と説明を受けて、これでもう大丈夫、また妊娠することができる、と私たち夫婦は単純に喜びましたが、実は腺筋症を手術で治すことも、術後に正常な妊娠をすることも他の大きな病院では到底叶えられないことだと知って、「なぜ、他の病院ではできないの?!」という気持ちが強いのも事実です。

これほど医療技術が進歩しているのに、そして、たくさんの患者がこの病気で苦しんでいるのに、なぜ齋藤先生に続く医師が出ないのか、とても残念です。私のように腺筋症であっても、それを手術で克服し、妊娠の喜びと生まれてくる生命を待つ幸せを、夫婦で手に入れることができる女性がもっともっと増えてほしいと思います。



	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球 (RBC)	360	423
ヘマトクリット (Ht)	31.2	33.0
血色素 (Hb)	11.0	13.2
CA-125	128	27
備考	病 理：腺筋症 (Adenomyosis) 術後 2 年 (妊娠)、現在 (H10.4.7) 妊娠 6 ヶ月 (Pregnancy) 横切開 8 cm、摘出物 75gm	

「腺筋症とわかって、初めて自分自身と向き合った」

「全摘」を一度は受け入れた

もともと身体は丈夫な方なので、病院とは無縁に生活してきました。だから、お医者さんの言うことはアタマから信じてしまうタイプで、初めて行った婦人科で「子宮筋腫があるから、全摘手術をしたほうがいいですね」と言われたときも、ショックではありましたが、「手術が必要だというのなら、子宮を取るのはいやだけど仕方ないか...」と半ば諦めの心境で、手術を受ける気になっていました。

初めて近くのT総合病院の婦人科に行ったのは、おととしの10月のことです。受診のきっかけは軽い膣炎にかかったことだったのですが、そこで子宮筋腫があると診断されたのです。そういえば、生理のたびに下腹部がすごく痛くなるし、出血も多かったので、子宮筋腫との診断に疑いをもちませんでした。

「1カ月後にベッドが空くので、手術をしましょう。ご主人にも説明しますから、連れてきてください」と言われ、その次の診察のときには主人にも一緒に行ってもらいました。子宮を全摘するという説明に、主人も「病気だから仕方ない」と思ったようでした。

待てよ、もう少し情報を得なくては

手術を待つ間、私はほかの病院にも行ってみようという気になりました。友人に手術のことを打ち明けたら、「1カ所の診断で簡単に手術を決めてしまわないで、ほかの病院でも診てもらったら」と言われたからです。

まずT総合病院の系列のT産院に行ってみました。全摘手術を受けるつもりではいしましたが、あえて「薬が何かで、全摘でなく治せる方法はありませんか」と聞いてみたのです。すると、診察してくれた院長先生は「筋腫だけを取る核出手術がありますよ」と教えてくれました。なんだ、子宮を残せる方法もあるんじゃないか、と急に目の前が明るくなって、「やっぱり、違う先生に診てもらってよかった」と思ったものです。

ところが、核出手術に希望をつないで検査を受けたものの、次にT産院に行くと、その日の医者は「MRIを見たら、とても核出手術はできない」と言うのです。どうして、こうも医者によって言うことが違うのだろう。それまでは医者を疑うことを知らなかった私の心に、初めて「待てよ、簡単に全摘手術を決めてはいけないんじゃないか」という気持ちが芽生えてきたのです。

このときから私の病院めぐりが始まりました。都心のO病院では「腺筋症ですね」と言われ、T大学病院では「内膜症ですね」と言われました。子宮筋腫と腺筋症の違いもわからないまま、私はそのつど違う診断結果に戸惑い、どうしたらいいのかわからなくなっていました。

解決法は自分で決めるしかない

病院めぐりをしていた半年あまりは、今思い出しても辛い日々でした。どこの病院でどのような治療を受けたらいいのか判断できない悩みに加えて、あちらの病院、こちらの病院と動けば交通費もかさむし、病院を変えるたびに同じような検査をするので検査費用もばかにならない。精神的にも経済的にもきつい日々のなかで、私は初めて自分自身と向き合い、自分と対話したように思います。これまでもいろいろな悩みを抱えてはきましたが、子宮の病気はそれまでのどの悩みよりも大きく、しかも、その解決法は自分で決めるしかなかったからです。

病院めぐりをしながら、せめて自分の病気を正しく理解したいと思い、図書館で本を捜したり、新聞や雑誌に関連記事が載っていれば切り抜いたりしました。斎藤先生の『子宮をのこしたい10人の選択』に出会ったのは、昨年5月ごろ、家の近くの図書館でした。子宮に関する本のなかから『子宮をのこしたい』を手にとったのは、これが一番読みやすかったからです。今にして思えば、たくさんある書物のなかから斎藤先生の本を選んだ自分自身をほめてあげたいと思います。

自分にとって必要な投資

斎藤先生の本を読んですぐに、半分は手術を受けるつもりで、行くだけは行ってみよう...と広尾を訪れました。エコーで診察した先生は「おそらく腺筋症でしょう。でも、手術で治せるし、子宮も残せます」とおっしゃいました。

手術費用が決して少ない額ではないことは本を読んで知っていました。経済的な負担があっても、自分の人生にかかわることだから、自分でしっかり考えて決断するつもりで来たのですが、先生のお話を聞いた時点で心は決まりました。これまでだって歯の治療で100万を超えるお金を使ってきたことを思えば、広尾で手術を受けることは「自分にとって必要な投資」だと思ったのです

診察のあとで事務長さんから無利子で分割払いもできるとの説明を聞き、これを使わせてもらうことにしました。費用の半分は一括して払い、残りの半分は分割で、とお願いしましたが、健康を取り戻して分割払いの返済を目的に働くことができれば、それはなんと意味のある働き方でしょうか。働く目的があるということは幸せだと、つくづく思いました。

2005年現在、費用の分割払いはしておりません。

スゴイ先生に出会えた幸

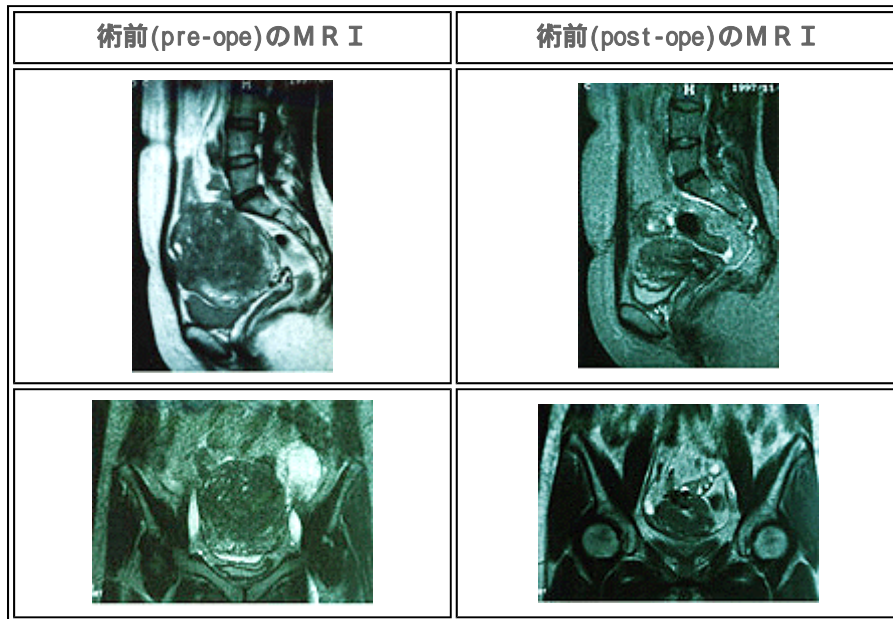
手術のときのことは今でもはっきり覚えています。手術日は夏の盛りの8月4日。

手術が始まると間もなく、寒くて寒くてたまらなくなりました。看護婦さんが肩をバスタオルで覆ってくれたり、手を握ってくれたりしても、いっこうに暖かくなりません。それどころか、歯がガチガチと音をたてるほどなのです。それを見た先生は、「クーラーを止めなさい」と看護婦さんにおっしゃいました。おかげで寒さはおさまったのですが、手術が終わって先生を見ると、手術衣が汗でびっしょり。「ああ、申し訳ないことをしたなあ」と思ったものです。



摘出されたのは腺筋症の部分265グラムと左卵巣の一部3グラム、内膜ポリープが0、1グラム。それを術後に見せられて、「子宮を残して、これだけのものを取り除いてしまうなんて、先生の技術はスゴいなあ」と痛感しました。手術の夜の痛さも忘れられません。手術のあと部屋に移ってからは、今度は暑くて暑くて、氷枕用にと看護婦さんがアイスノンを持ってきてくれたので、それをお腹の上に乗せたりして痛さを紛らわせていました。

そんなことも今はなつかしい思い出。手術のことを思い出すたびに、この時代に生きて、スゴイ先生に出会えて幸せだったと感謝しています。逆に先生からは「ここに辿り着けたのは、あなた自身が自分で情報を集める努力をしたからだよ」とほめられて、そのことも嬉しい思い出です。



	術 前 (pre ope)	術後3カ月(post ope)
赤血球 (RBC)	283	406
ヘマトクリット (Ht)	34.5	39.3
血色素 (Hb)	8.5	13.5
CA-125	220	21.0
備考	摘出物 : 268.1 g m 内膜ポリープ : 0.1 左卵巣 : 3 g m	

「摘出した筋腫を目の前にした時“コイツが私を苦しめていたのだ！”と思ったと共に“よくまあこんなに大きくしてしまったなあ”と複雑な気持ちでした」

宮部敦子（40歳）

トイレで決意 なんとかしなくては・・・

このHPをご覧になっている方は、筋腫や内膜症をかかえて困っておられる方、家族にそういう方がいてなんとかしてあげたいなと思っておられる方などさまざまでしょう。私も、つい数カ月前には同じような気持ちで患者としてこのHPをみていました。

手術に先立つ2カ月ほど前、私は軽い気持ちで『子宮』というキーワードから探りあてた広尾メディカルのHPをみていました。しかし、そこで次々と展開されている実証データを目の当たりにし、このクリニックで私も救われるかもしれない、とにかく一度行ってみようという気になるのにさほど時間はかかりませんでした。しかし、本当に私の子宮も元どおりになって、以前の健康な私に戻れるのか、それについては半信半疑の気持ちであつたと思います。

広尾メディカルを訪れる頃、私の毎月の生理の出血量はまますらぬ状況でした。2日目、3日目の夜には子供のおねしょ防止用のパッドをあてなくてはならないほど、すごいものでした。それをあててすら1時間から2時間おきに起きなければ出血でベッドが汚れてしまうので毎月睡眠不足でふらふらしていました。さらには出血がとまったかと思われる9日目や10日目ですらまた大量の出血で出張先の空港で洋服を汚し冷や汗と涙を流したこともあります。トイレにいくたび、流れ飛び出て止まらない血や、まるで挑戦的な勢いで飛び出すレバーのような血の塊をみながら、こんな人生をあとどれ位我慢すればいいのか、こんなことならもう子宮をとってしまつて楽な日常を送りたい、そこまで追い込まれていました。

生理の量というのは、そもそも他の人とは比較できません。ですから廻りで生理の量が多いのよという話はよく聞くものの、それがどの位異常なものなのかかわからないまま耐えていました。結果それがさらに子宮を悪くしていたとも思わず・・・

いつかは血が少なくなるのではないかなそんな漠然とした全く根拠のない希望をいだかざるを得なかったのは、その時点で通っていた都内の病院の医師から「全摘しかありません、もう全摘の大きさです。」と宣告されていたことが大きな要因です。

気持ちの半分では全摘も、もはや、やむを得ないと覚悟しつつ、友人に紹介してもらい全摘した40代の女性に電話で彼女がどのような状況で全摘をきめていったのかを聞いていたりもししていました。私も近いうちに覚悟を決めよう、そんな矢先に出会った広尾メディカルのHPでした。

頑なになっていた私の気持ちを氷解してくれた田中さん

広尾メディカルを訪れた5月13日、私はこれだけは聞こうと思ったことをまとめたメモを片手に気合いを入れて先生の部屋へ入っていったことを覚えています。多分、相当緊張もしていたし、顔はひきつっていたことと思います。今度こそこれで決着をつけたい、もう「様子をみましょう」などと言われたくないし、もうそう言われても後に引けないくらい私の子宮も精神も抜き差しならない状況でした。

「どうしてこんなになるまで放っておいたの？」先生にそう言われても、放っておいたというより私は努力していたのに、という気持ちでした。漢方もハリも何もかもやっていたのに・・・と。今までの病院での不快な体験があるため私自身多分かなり頑なになっており、猜疑心もかなりであったと思います。おおげさに言えば婦人科全般の治療に対して・・・

エコーで診療を受け説明を受け、子宮は残せませんという先生の診察をもらっても、本当にそれで私の生理は軽くなるのか、その点について確信をもてなかった私は思わず先生に「本当に軽くなるのでしょうか？」と尋ねました。先生は「では、2階に今入院中の患者さんがおられるから聞いてみたらいいよ」とおっしゃり2階へ。そこでは月曜日に手術し、わずか2日後の患者さんがパジャマ姿で点滴をしながらも元氣そうにソファに座っておられました。

そこで二人の患者さんにどうして手術をするに至ったかとその当時どの位生理の量が多かったかを聞きました。ずいぶんぶしつけだったと思います。でももう必死の思いでした。

ところが、患者さんのお二人は共に20代でした。当時40歳になったばかりの私は20代の方だし、それに私よりは全然軽いじゃない、とそれでも本当に治るのかとまだしつこく疑問を抱いていました。そこで私は、さらに先生に「でも先生、お二人とも若いし、私ほどすごい生理ではなかったみたいなので・・・」と話す。「しょうがないなあ、そんな血の量を争ってもしょうがないんだけどねえ、じゃあね、一人田中さんという方を紹介するからね、今、電話してみるから、この人もすごい貧血だったから話を聞くといいよ」とその場で電話してくださいました。

この電話が結果的には私が手術をする決意をした大きな一歩となりました。田中さんとは今でも電話をしあうお友達となりました。彼女に出会っていなければ多分決意が遅れたことは間違いありません。彼女はその電話をした日つまり5月13日初診の日に心良く仕事先の駅前の喫茶店で会ってくださいました。

荻窪の駅で待ち合わせ喫茶店に入ると私は症状と経過、そして未だ手術をするかどうかは迷っていることを一気に話しました。彼女の手術前の症状と私の症状はかなり近いものもあり、年齢的にも全く同じということで私は確信の質問、本当に生理は軽くなるのかを聞きだしたと思います。

彼女がそれに対してとても静かな口調で「だいじょうぶよ、私も今では手術前の10分の1位の生理の量になったのよ。今ではもの足りなくらいだし、今ではどこでも旅行にもいけるのよ」と決して説得するような口調ではなく、安心感を与える落ち着いた態度で相談にのってくださいました。「先生はとてもいい先生、私は本当に良かったと思っているの。ただし私はサクラでもなんでもないわよ」と笑いながら答えた時、私はほぼ決意を固めていました。あとは家に帰って夫と話してみよう、そう思って明るい気持ちで電車に乗っていました。帰宅後、夫と相談、夫は子宮が残せるというならばそれが一番と快く承知してくれました。

先生は3ヶ月検診でお会いした時にも「僕のことはすぐに信用できないのに同じ患者さん同士ということですぐに信頼できるんだねえ、やっぱり医者より患者同士なのかなあ・・・」と口惜しそうに私におっしゃるのですが、それに対して私は「いいえ先生を信用できなかったわけではなく、ほぼ8割心を決めていてもあと2割で確信をもって背中を押してくれる同じ病気の仲間がいたことで私はここまでスピーディに安心して決められたのだと思います」と答えました。

最終的には自分が決意しそして夫がそれをサポートしてくれたことではありますが、田中さんを紹介され同じ体験者の情報をまさに生の声で聞けたことで私は安心して手術に望めたわけですから、先生の電話とそれを受けてくださった田中さんの温かさ、それで私は救われたと思っています。

克明な手術レポートと斎藤先生の自信

先生のこういった暖かい配慮は入院中もたくさん感じました。先生は寸暇を惜しんで手術をした患者さんの手術報告書を克明に記録として残してくださりそれを退院までには1冊のファイルにしてくださいました。手術中の処置や手術前のMRIの映像、それと摘出した筋腫の写真なども添えてリアルなレポートができ上がっていました。私はそのレポートをいただいた時、先生の自信に満ちた治療の結果が私のからだの中でまたあらたな子宮となって生まれ変わって生きているんだなと感動しました。

手術後最初の生理が来た時、私はあらためて全摘しなくてよかったと確信しました。夫も両親も中学生で最初に生理が来た時のように喜んでくれました。本当に普通の生理、この2年ほど異常な生理に悩まされていた私にとってはまさに生まれ変わったような気分でした。

手術日は田中さんの誕生日

一旦決意すると早く手術の日がくれば良いなと皆さん感じられると思います。決意するまでなかなか辛いですよ。私も仕事の段取りをつけ、手術日を決めてほっとしたところで田中さんに報告しました。「6月22日に決まったのよ」と話すと「えっ?!私の誕生日だわ、きょううまくいくわよ~」と言われ何か見えない糸でつながっているような気がしたものです。

手術日に病院にどきどきしながら到着すると看護婦さんが「お手紙ですよ~」と封筒を渡されました。田中さんからの「がんばってねカード」でした。そこでもまた私は彼女の優しさにふれ、私もよくなったら何か役にたてるように同じ患者さんのために情報を提供しよう、その為にもまずは手術を乗り切ろうと思えたのでした。

入院中の出会いと励ましあい

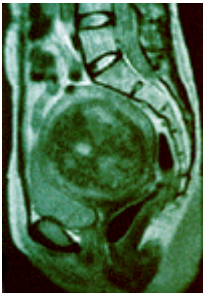
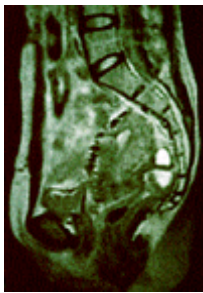
手術後1日目はじめて同じ日に手術をされた藤井さんと会いました。何せ同じ屋根の下で隣同士の部屋で手術後のつらい一夜(といっても大丈夫です)を過ごした仲間です。先生から紹介されそれからはもう毎日2人で点滴片手にお互いの部屋を訪問しあい、話をしたり食事を一緒に食べたりで仲良くなり、その後今だに電話で連絡をしっかりとっています。退院後も傷口の状況などをお互い報告しあい退院後の日々をとて安心できました。

私は手術日の夜はナースコールを握り締め何度も看護婦さんをお呼びしてしまいおそらく多大なご迷惑をおかけしたと思うのですが、彼女はたった1度ほどしか看護婦さんをお呼びしなかったとっても強い女性で、私はここでも彼女の強さと明るさに支えられて入院生活を乗り切りました。

もちろん暑い中お見舞いに来てくれ、ファックスでメッセージを頻りに送ってくれた夫やそして両親、妹夫婦には感謝しています。

同じ気持ちでがんばる

症状の違い、広尾クリニックに出会うまでの経緯の違い、年齢の差、未既婚の差、出産経験の差などももちろん患者さんそれぞれで異なるとは思いますが、健康になりたい、しかも子宮を残したいという思いがありそれを実現して下さる齋藤先生がここにおられ、齋藤先生もご自身の人生をかけてやっておられるのですから、先生を信じて自分もがんばってみよう、そんな気持ちが出てくればもう決意が固まるのははすぐです。患者同士の交流もオープンで自由なこの広尾クリニックで手術をして精神面でもずっと楽に乗り切れたと思います。

術前(pre-ope)のMRI	術前(post-ope)のMRI
	

	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球(RBC)($\times 10^2$ /ul)	390	481
ヘマトクリット(Ht)(%)	32.2	42.4
血色素(Hb)(g/dl)	10.5	13.5
CA-125	61u/ML	18u/ML
備考	摘出物 : 筋腫 : 335g 内膜ポリープ : 0.1g 病理 : leiomyoma.polype.no malig	

通院略歴

32才	東京女子医大にて一通りの不妊検査を受ける。その時点で筋腫は発見されなかった。
34才	友人の紹介で都内クリニックにて筋腫が指摘されるが、卵大の大きさであり様子を見ましようということになる。
34才 ~36才	漢方でなんとか筋腫を治そうと考え銀座の不妊専門の漢方センターで2年ほど漢方薬を煎じて飲む。この頃から血の塊が生理時にできるようになり、それを報告すると漢方医はそれは筋腫がつぶれているからですと言われ信じて飲み続けた。しかし一向に改善されないまま2年続けることとなる。
36才	再度同都内クリニックを訪れると筋腫がとても大きくなっていますとうこと。突然の全摘出宣告。あっけにとられながらも、漢方にも見切りをつけ、やめる。新たな病院探し開始。
37才	この頃から貧血がひどくなり、毎月の出血も増える。
38才	都内病院で子宮頸部の癌検診をしたところ上皮内癌の疑いがありということであわてて再検査。そこでも筋腫があるから子供はあきらめた方がいい。もう全摘してしまった方がいいでしょう。癌の疑いもあるし、と簡単にいわれる。 そこでさらに別の都内大病院を友人に紹介してもらいそこでどうするべきかを相談。 そこで頸部だけレーザーで円錐切除すれば組織検査にだせるしさらに子宮も残せるという判断で10日間入院し手術。
39才	癌の疑いはなくなったものの生理がどんどん重くなり、もう全摘しかないので子宮の延命策ではありますが、ホルモン剤で半年ほど生理を止めて延命策をとりましようといわれる。いずれは子宮を全摘出しなくてはならないのかと覚悟を決め始めるが、納得のいかない自分もそこにいるのを感じる。何故こんなことになったのか、どうして他の病には治療があるのに筋腫についてはほとんどのケースが全摘出になってしまうのか、それが納得いかなかった。 どのようにして皆、子宮をとってしまうことを納得していくのか、それが知りたいというのが心境だった。 子供をあきらめるということ、子宮を全てとってしまうということ、決着をつけるのはあまりに過酷な選択であり私には精神的なショックがありすぎるだろうと思われた。徐々に時がたってあきらめていくということ、臓器がないからあきらめるということとはかなりの差がある。 解決策のないまま、友人に相談したり、本を読みあさったり気持ちだけ焦っていた。
40才	インターネットで広尾クリニックと出会う。

「手術に反対していた主人も今では納得。感謝しています」

大徳勢津子（36歳）

友人が見せてくれたホームページ

私が広尾のことを知ったのは、日頃から病気のことを話していた友人がインターネットをやっていて、「検索してみたら、こんな病院があったわよ」と広尾のホームページを印刷して見せてくれたのがきっかけです。

その頃の私は、生理痛がひどくて、あちこちの病院に通っていました。生理が始まる数日前からお腹や腰が痛くなって、それが生理中にはもっとひどくなり、3日間は家に閉じこもりきりという状態でした。出血量も多くて、タンポンとナプキンを同時に使っているけど、1時間おきに取り替えるほどで、出血に赤黒い塊が混じることもよくありました。下腹部から腰にかけての何とも言えない重苦しさに耐えきれず、帰宅した主人に腰を強く指圧してもらったこともたびたびでしたから、主人には私が生理のたびに辛い思いをしていることはわかっていたと思います。

筋腫がありながら2児を出産

子宮筋腫があることはずっと前、長女を妊娠した時からわかっていました。幸いなことに妊娠を妨げるほどには筋腫が大きくなかったのが、無事に出産までこぎ着けましたが、お産は大変でした。微弱陣痛でなかなかお産が進まず陣痛誘発剤のお世話になりましたが、それでも子宮口が分娩できるくらいまで十分に開かないのです。

2昼夜を陣痛室で過ごしてやっとの思いで出産しましたが、産後の肥立ちも思わしくなく、ずっと出血が続いて、1カ月も経ってから黒い袋状の塊が下りてきた時には本当にびっくりしてしまいました。胎盤が残っていたと病院で聞いて、またびっくり。今にして思えば、難産だったのも、後産がよくなかったのも、筋腫があったために子宮の収縮が十分でなかったことと関係があるのかもしれない。

筋腫があつての出産でしたので、2番目の子どもはもう無理と思っていたところ、それから3年目に長男に恵まれました。長女の時には1つだった筋腫が長男の時には2つに増えていたそうですが、妊娠中はたいしたトラブルもなく3,800グラムの大きな子が生まれました。筋腫があつても2人の子を受かったことは本当に幸運でしたが、出産の時にお世話になった病院では、「これから先の妊娠はおそらく無理だと思いますよ」と言われました。

当然のように「全摘」を告げる医師

生理痛がひどくなったのは、長男が生まれてからですから、この5～6年のことです。初めのうちは「ひと月の3～4日、我慢すればいいのだから」と堪えていたのですが、次第に症状が重くなっていきました。なんとかしなくてはと思い、母に勧められて漢方薬を煎じたものを2～3年飲み続け、プロポリスが筋腫に効くと聞けばそれも服用したりしました。お腹を温めると筋腫が小さくなるという機械を10万円で購入して、お腹に当ててみたこともあります。でも、何をやっても症状が軽くなることはありませんでした。

医者通いを始めたのは去年のことです。近所の開業医や大学病院などあちこちに足を運びましたが、医師の言うことは実にまちまちでした。近所の女医は「薬で筋腫を散らすこともできる」と説明し、もう一人の女医は「貧血がひどくなければ、しばらく様子を見ましょう」と言いました。それを聞いて、私は「手術しなくても、薬で治るんだ」と一人合点したのですが、大学病院での診断はそんな暢気なものではありませんでした。書籍の「名医100選」を手がかりに行ったお茶の水のJ大病院でもK病院でも、当然のように「子宮全摘」と告げられました。

K病院では診察の後で、まるでベルトコンベヤーに乗せられるように、「手術日を予約して行ってください」と言われ、とてもショックでした。すでに広尾のホームページを読んだ後でしたので、「筋腫だけ取って、子宮を残すことはできないのでしょうか」とたずねてみたのですが、「筋腫を取り除いた後のペラペラの子宮を残してどうするんですか」と一笑に付されてしまいました。

先生に会って不安は氷解

いったんはK病院に手術の予約は入れたものの、どうしても子宮を失うことを受け入れられず、ずっと頭の片隅にあった広尾を訪ねてみる気になって、広尾のホームページを探してくれた友人と一緒に出かけたのは、今年の11月の終わりでした。地図をたよりにたどり着いた広尾は、頭に思い描いていた病院のイメージとはほど遠い、まるで住宅のようなたたずまいで、「ここで子宮保存手術を本当にやっているの？」という思いから、入るのがためられるほどでした。

「せっかく来たんだから、話だけでも聞いて行こうよ」と友人が促してくれなければ、齋藤先生にお会いすることもなく引き返してしまっていたかもしれません。そして、K病院で全摘手術を受けていたかもしれません。

齋藤先生にお会いして、それまでの不安は氷解しました。J大学病院でもK病院でも全摘しか方法がないと言われてきたのに、齋藤先生は「あなたよりもっと症状の重い患者さんも子宮保存手術で元気になっているから、大丈夫」とおっしゃるのです。そのお話を聞いて、先生の手術を受けよう、K病院の方は帰宅したらさっそくキャンセルしようと心に決めていました。

反対する主人、支えてくれた母

私の気持ちは決まっているのに、思いがけないところで強い反対に遭いました。生理のたびに私が辛い思いをしているのを知っている主人からの反対です。

たまたま主人の会社の上司の奥さんも子宮筋腫で、少し前にK大学病院で全摘手術を受けており、主人はその上司からK大学病院の教授を紹介されていたのです。主人が広尾で手術を受けることに反対した最大の理由は、「日本で有数の大学病院でできない手術を、一開業医ができるわけがない」というものでした。その主人の気持ちを後押しするように、K大学病院の教授の診断も「全摘が最適」というもので、広尾の保存手術についてたずねた主人に、教授は冷やかに「そのようなところは聞いたこともない」と答えたのです。

主人ばかりでなく、主人の母も姉も「大学病院の先生に任せなさい」と言い、齋藤先生の本『子宮をのこしたい10人の選択』を見せても、「本にはいいことしか書いていないから。あなたはだまされているのよ」と言い出す始末です。

そういう中で、唯一人、「子宮を残せるものなら、ぜひその先生にお願いしなさい」と応援してくれたのが、徳島にいる実家の母です。母自身がかつて卵巣を取っており、その後、身体の不調に悩まされた体験から「残せるなら、ぜひそうしなさい」と勧めてくれたのです。母方の家系は婦人科が弱く、祖母も伯母も子宮筋腫で全摘手術を受けているので、母は身近なところで全摘による後遺症の大変さを実感してきたのだと思います。

母の応援に力を得て、私は主人に「一度、齋藤先生に会ってみて」と毎日のように説得し、ようやく主人と一緒に広尾に行ったのは年の瀬も近くなってからでした。広尾に行くまでは、あれも聞きたい、これも確かめたいと、まだ半信半疑だった主人も、齋藤先生の説明の前には一言もなく、私が拍子抜けするほど神妙に「よろしくお願ひします」と頭を下げてくれました。

オペは2月2日、筋腫と内膜ポリープなど400グラムを摘出して無事終了。退院の日にはすっかり元気になって、回復の早さには主人も目を見張っていました。

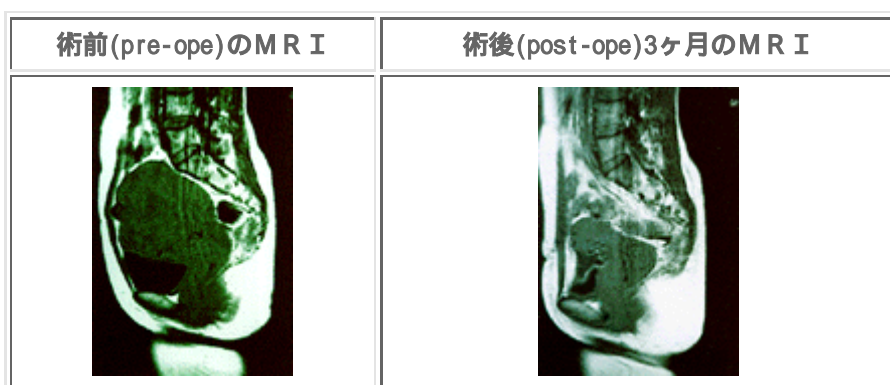
徳島から患者さんを紹介

母は徳島から広尾に患者さんも送り込んでくれました。その方とは母と同じ体操クラブに通っていたご縁で知り合ったのですが、30代に卵巣腫瘍で片方の卵巣を取った後の不調に加えて、子宮筋腫と腺筋症でひどい生理痛に悩んでいました。卵巣を手術した際の癒着が原因でたえず腹痛にも悩まされ、体調が思わしくなく、神戸の自宅にご主人を残して徳島の実家に帰って静養しておられました。

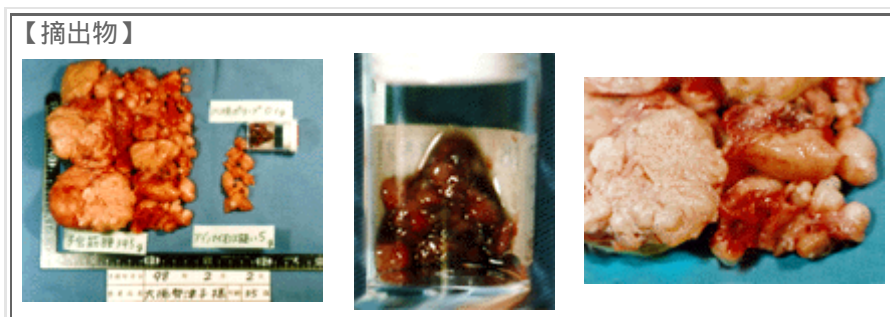
卵巣を片方取っただけでこんなに体調が悪いのだから、子宮全摘なんてとても耐えられない、と日々思い悩んでおられたところへ飛び込んできた私の体験談は、彼女にとってはこの上ない朗報だったと思います。

彼女はさっそく上京して、斎藤先生に診ていただき、5月に手術をされました。前の手術で癒着した部分も先生はきれいに剥してくださったそうで、術後の回復が前の手術の時とはまるで違くと、とても喜ばれました。すっかり元気になられて、今は実家のお父様の介護に励んでおられます。

親とは本当にありがたいものです。私は母に励まされ、手術費用も母が出してくれて手術に臨むことができましたが、彼女の場合も実家のお父様が手術費用を出してくださったそうです。こうして元気になれたのも母のおかげ、母のことを思うたびに感謝しています。



	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球(RBC)($\times 10^4$ /ul)	5.8	5.6
ヘマトクリット(Ht)(%)	39.2	39.9
血色素(Hb)(g/dl)	13.5	13.5
備考	摘出物 ; 内膜ポリープ : 0.1 子宮筋腫 : 395g 腺筋症 : 5g	



「手術から4年半目に、MRIで"再発なし"を確認しました」

渡部菜々子（38歳）

手術から4年半目に、MRIで"再発なし"を確認しました

この夏、久しぶりに広尾を訪ね、斎藤先生にお会いしました。

子宮筋腫で先生に手術していただいたのが94年の1月24日、術後のMRIを見ていただいたのが6月23日ですから、かれこれ4年半ぶりでした。広尾が現在の横浜市鶴見に移転したのは94年の春で、私が手術を受けたときにはクリニックはまだ港区南青山にありました。ですから、私は以前のクリニックで手術を受けた最後の方の患者ということになります。

4年ぶりに広尾を訪ねた目的は、MRIによって子宮筋腫が再発していないことを確認するためでした。手術後は「生理ってこんなに軽いものだったの？」と驚くほど出血量が少なくなり、それまでは生理日を避けて旅行や遠出の予定を立てていたのが、まったく気にならなくなっていましたので、筋腫の再発を疑うような兆候は特になかったのですが、念のために診ていただこうと思ったのです。

MRIに写し出されたきれいな子宮

若い患者ほど術後の再発を心配するそうですが、その不安は私にもありました。特に自覚症状がないまま、ひよんなきっかけで子宮筋腫が見つかり、手術したのが34歳のとき。本人が気がつかないうちに子宮に筋腫がいくつも出来ていたなんて、まさに"青天のへきれき"のショックでしたが、筋腫の原因が今なお特定できないということも不安の材料でした。原因がわからない以上、ひょっとしたら再発することもあるのではないかと、という心配が若い患者ほど頭をかすめるのだと思います。

そんな心配をよそに、4年ぶりのMRIの画像は、見事に"再発なし"の子宮を写し出していました。術後5カ月して撮った4年前のMRIの画像とほぼ同じ子宮を自分の目で確認し、「これから先も再発することはまずないでしょう」という先生の言葉を聞いて、「ああ、あのときに手術を受けていてよかった」とつくづく思いました。

旅先で見つけたお腹のこぶ

ひよんなきっかけで筋腫が見つかったと書きましたが、下腹部のこぶに初めて気がついたのは、旅先のバリ島のホテルで、ベッドの上に寝ころんで何気なくお腹をさわったときでした。ちょうどダイエット中のぺたんこのお腹に何かこぶのようなものが触れるのです。「あれっ、なんだろう？」とびっくりして、一緒に来ていた姉に「お姉ちゃんのお腹には何か触れるものはない？」と聞くと、「そんなもの、ないわよ」と言うのです。

バリ島に旅行したのは93年11月の末でしたが、実はこの1カ月前に母の勤めで初めて子宮ガン検診を受けています。結果は「異常なし」で、その時に内診した医師からも何も言われませんでした。ですから、お腹のこぶが子宮の病気であろうとは露ほども考えなかったのです。

お腹のこぶが気になって、旅行から戻るとすぐに従兄弟が開業している病院に行き、超音波で腹部を診てもらいました。従兄弟は私のホームドクターで、何か心配な症状があるとすぐに飛んで行くのですが、内科の従兄弟は「婦人科かもしれないから、一度きちんと検査したほうがいいね」と、大学病院の婦人科に紹介状を書いてくれました。

強く願っていることは必ずかなう

大学病院での診断は子宮筋腫で、すぐに手術を勧められました。手術イコール全摘です。あまりに唐突で、「この先生、何を言っているの？」と医師の言っていることがよく呑み込めず、自分が子宮筋腫の病人であるという現実感はまったくありませんでした。

年明け早々にMRIを撮ることを予約して帰宅してからも、釈然としない思いが続きました。それは「筋腫は良性の腫瘍なのに、なぜ子宮ごと摘出しなくてはならないの？」という疑問です。

B型の私はもともとプラス思考でものごとをとらえる傾向が強く、この時も「自分が強く願っていることは必ず実現する」というマーフィーの法則を信じて、「きっと全摘せずに治る方法がある」と強く強く願いました。

斎藤先生の本『子宮をのこしたい』に出会ったのは、大学病院でのMRIの検査日を待っている間の暮れも押し詰まった頃でした。たまたま立ち寄ったそれほど大きくもない本屋の、家庭医学のコーナーで目にしたのが先生の本だったのです。『子宮をのこしたい』というタイトルは私の気持ちそのまま、その背表紙の文字に視線が止まり、書棚から本を手にしたときに「これだ!」という確信のようなものがありました。

全摘でない方法を、と強く願った気持ちが斎藤先生の本に引き合わせてくれたのだと、今でも思っています。

MRIのコピーを持って広尾へ

大学病院でMRIを撮ったのは1月10日。そのときにはもう斎藤先生に一度診ていただくという気持ちがありましたので、どのような結果になろうと覚悟はできていました。MRIの結果、やはり全摘という診断でしたので、思い切って担当医に「レーザーで子宮保存手術をする方法があると本で読んだのですが」と話してみました。

このホームページの体験談でも皆さんがレポートされているように、たいていの大学病院は他の医療機関との連携を好まず、ましてや子宮全摘が治療の常識となっている子宮筋腫に子宮保存手術を行うなどという開業医の医療行為を認めようとはしないものようです。この担当医もきっとイヤな顔をするだろうな、と思ったのです。

ところが、意に反して、担当医は「色々な方法を選んだほうがいいですよ」と言って、こちらから頼む前に自らかたわらの看護婦さんにMRIのコピーをとるように命じたのです。こういう医師も大学病院にいるんだ、と嬉しくなって、強く願ったことが一步一步実現していくように実感したものです。要はその医師のパーソナリティなのではないでしょうか。

MRIのコピーを受け取るとすぐに広尾に電話をして、初診の予約を入れました。そして、初めて広尾に行ったのが1月14日。持参したMRIの画像を見ながら説明を受け、子宮保存手術可能との斎藤先生の言葉に、手術を受けることをその場で決めました。

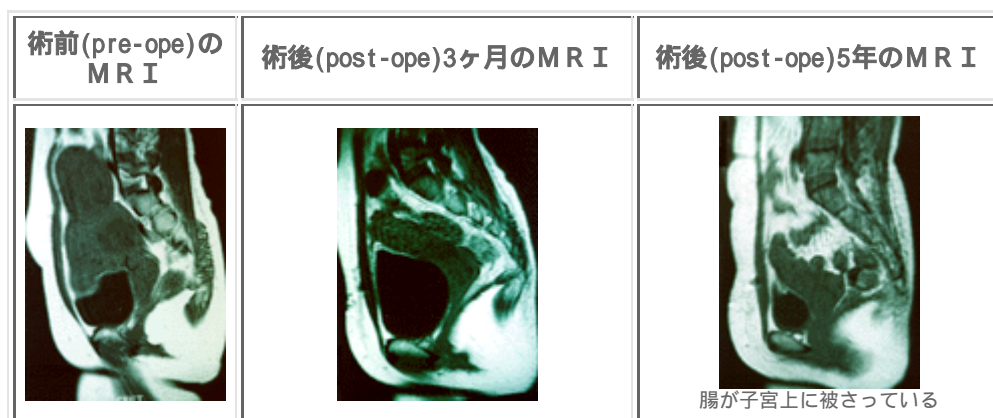
従兄弟が言った「適正な診療報酬だ」

いったん決めたら、それに向かって突き進む。これはB型の特徴かもしれません。14日の初診で手術を予約した私は、広尾からの帰途、従兄弟の病院に寄って、その日のうちに手術に必要な検査を受けました。MRI以外の胸部X線や心電図、血液検査、尿検査などです。

広尾が自費診療であること、そのため費用の患者負担が大きいことについても従兄弟に意見を求めてみました。病院経営者と同じ立場の従兄弟は、「これだけの手術内容と術後のケアを考えれば、決して高い診療報酬ではないと思う。保険診療だと自己負担分が少ないから医療費が安いように錯覚しているが、仮に保険で手術をして2割負担で40万円の医療費を払ったとしても、実際には100万円以上の高額な医療費がかかっていることになる。本来、医療というのはお金がかかるもの。それに、自費診療をしている医療機関に対しては税務署の監査が厳しいので、むしろ適正かやや少ない額の診療報酬と言えるのではないか」と話してくれました。

自己負担が高額であるという現象面だけを見て「法外な医療費をとっている」と広尾を攻撃する人たちがいると聞いていますが、従兄弟の話を聞いて、私は手術の内容はもちろん、費用についても納得して手術に臨むことができました。

その信頼感がなければ、術後4年半のこの夏に、"再発なし"を確認するために広尾を再び訪れることはなかったと思います。



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)($\times 10^4$ /ul)	429	482
ヘマトクリット(Ht)(%)	37.4	42.9
血色素(Hb)(g/dl)	12.5	14.7
備考	腹部の腫瘍をじたのみで、その他の自覚症状なし。 摘出物 ; 415 g 平滑筋腫 (leiomyoma)	

「あきらめないで！ 子宮を残す事は出来るのです」

藤井久美（48歳）

「お願い！ 今だけでも止まって」

「筋腫はあります。でも小さいので何もしなくても大丈夫です。一年に一度の定期検診は受けるようにしてください。」4～5年前、定期検診の際に告げられてからこの病気とのつきあいが始まりました。それから2～3年は生理の量が多いため貧血の治療だけは続けていました。そして時々2～3ヶ月ぶりに生理が来たときなど10日たっても出血が止まらず、産婦人科へ行っては止血剤などを注射してもらったりして、その場をしのいでいました。昨年9月のはじめ、その夜も前日から始まった生理がひどくなり始めていました。

10時ごろ電話のベルが鳴り、大学生の息子が運転していた車が追突されたという交通事故の知らせが入りました。我が家は母一人子一人のためその日から私は、いろいろ事務手続きに追われました。ですがこれまでにない大出血は、止血剤を打っても打っても利いてくれません。「お願い！ 今だけでも止まって」と叫びたいような気持ちでした。

全摘と言われて・・・

このころ通っていた産婦人科の先生は、高齢の優しい先生でした。極度の貧血になってしまった私をとて心配して、ホルモン療法でとりあえず出血を止めようということになりました。そうしているうちに生理があがるだろうという見解でした。半年位続けている間、生理がなかったので体力的にもだいぶ落ち着いていました。しかしあまり長い間、その薬を続けると副作用が出るというのでやめて様子を見ることになりました。

このまま生理が来なければいいなという思いとはうらはらに、2～3日で生理は来てしまいました。そして、また止血と貧血の注射に通う日々が始まりました。3月、4月と10日間ほど、5月は2週間でやっと止まり、こんなことをいったいつまで続けるのだろうか、とても不安になっていました。先生も「筋腫は大きくないんだけどなあ、これ以上ひどくなるようだったら大学病院に紹介状書くから手術して取ってしまったほうがいいかもしれないね。」と初めて全摘のことを口にされました。私はぎょっとしました。そして年齢48歳で子供も一人いる私には、手術を拒否する言い訳がないことに気づきました。

広尾メディカルクリニックのホームページに釘付けに

何の対策もないまま2週間たってもまたひどい出血が始まりました。以前にも増してすごい勢いです。このままでは出血多量で死んでしまうのではないかと危機感にも襲われました。どこかに私を救ってくれるところはないかと、すぎるような想いでインターネットを覗いてみました。そして子宮筋腫で検索した画面に現れた広尾メディカルクリニックのホームページに釘付けになっていました。プリントアウトした書類を読み終えてすぐクリニックに電話しました。とにかく行って診察を受けてみたい、こんな方法があったなんて、どうしてもっと早く調べてみなかったんだろうと、せきたてられるような気持ちで翌日クリニックに向かいました。

その時の体調はかなり悪く、30分に一度くらいでしょうか乗り換え駅ごとにトイレに行かなければいけない状態でした。階段は2～3段上ただけで苦しくなっていました。やっとたどりついた所は子宮を残したい女性の駆け込み寺という印象からかけ離れたとてもきれいな建物でした。

二階からゆっくりと降りてきた斎藤先生は、白衣など着ていなくてお医者様っぽくない方でした。診察室でも産婦人科ではお決まりの内診をするあの屈辱的な台などなく、普通のベッドでお腹の上からエコーで調べるだけでした。先生の診察では子宮の外側がりんごぐらいの大きさになっていて多分、腺筋症でしょうということでした。「だいじょうぶ 残せますよ。」と自信たっぷりに言ってくださいました。あとでいろいろな資料で調べたところ腺筋症の治療法は全摘出以外にはないとなっていました。私は先生の言葉を聞いたとたん「お願いします。手術をしてください。」とっていました。

手術前にはMRIなどの詳しい検査が必要とのこと、クリニックからも遠くない鶴見駅の近くの病院にさっそく翌日検査の予約を入れてくださいました。クリニックから最寄りの駅までの道を歩きながら、この体の状態で

世田谷の自宅まで戻り、明朝また鶴見まで出てくるのはとても無理だと思いました。クリニックに電話すると、明日検査をする病院に近いホテルを予約してくださいました。その夜はホテルの部屋で先生にいただいた本（『子宮を残したい10人の選択』）を一気に読みました。世の中にはもっともっと大変な人がたくさんいるんだなあ、がんばらなくちゃと、相変わらずの流れるような出血に一晚中トイレに通いながら思っていました。

誰に何を言われようと子宮を残しておきたい

翌日、検査の結果を見て手術の日は二週間後に決まりました。それから私の頭の中は、これからの二週間をどうやって過ごそうかという事でいっぱいになりました。手術後一週間休むためには、しなければならぬ仕事がたくさんあります。でも今の私はとても働ける状態ではありません。働くというより動くことさえつらい状態でした。

先生に相談して検査を受けた病院に入院させてもらって輸血をする事になりました。輸血を4日間して、体調が良くなったのかやっと出血が止まってくれました。救われた思いで手術日までの日を仕事に費やす事ができました。入院して驚いた事はその病院の婦長さんが挨拶に来られたとき、「どうして子宮を残す事にしたの？私だったら取ってしまうのに」と言われた事でした。この言葉は手術を決心してから友人や身内からも言われましたが、医療に従事している女性からの言葉とはとても思えない事でした。

私は斎藤先生の本や朝日メディカルの記事などを彼女に見せました。「そりゃあ本にはいいように書いてあるに決まってるじゃない。」と頭から信じてないような口振りでしたが「いいから読んでみて！」と強引に渡しました。翌日また訪れた彼女は「昨日はすみませんでした。よくわかりました。」と謝っていました。

日本人女性の4人に一人の割合のポピュラーな病気に対する一般の人の認識とはそういうものようです。でも誰に何を言われようと子宮を残しておきたいという決心は変わる事はなく、斎藤先生以外に私を救ってくれる人はいないと信じて手術台へ向かいました。

子宮が残った痛みだと思うとがんばる勇気が湧いてきました

手術中、先生はずっと語りかけてくださいました。話題は趣味のことなどにも及び、「先生はゴルフですか、それともテニスかしら」とお聞きすると「僕の趣味は手術だよ、筋腫で苦しんでいる女性を救ってあげることができるとすばらしいじゃない」そして「子宮だから取っていいということはない、取ってもいい臓器なんてひとつもない」と続けられました。私は百万の味方を得たような気持ちになりました。

そして手術が終わって一晩つらい夜を過ごすことになるのですが、私のからだの中に確かに子宮が残った痛みだと思うとがんばる勇気が湧いてきました。これがもし、全摘の手術だったとしたら、涙と絶望の一夜だったに違いありません。

1週間の入院

退院までの毎日は点滴などの多少不便な点はあるものの忙しい日常を逃れて訪れたペンションで休暇を過ごしているような気分でした。何かの縁で同じ日に手術を受け隣の部屋になった宮部さんとは40代同士（とはいっても実は8歳も私のほうが年上なのですが）血液型も同じO型ということもありとても仲良しになってしまいました。

手術は、月曜日、退院はその週の土曜日です。目的志向の強い私たちは、火曜日の点滴棒を押しながらの歩行、水曜日の二階までの階段上り、などリハビリプログラムを次々にクリアし、「私たちって若い人たちに負けてないよね」と一緒に食事しながら自画自賛してはおなかの傷を押さえて笑い転がっていました。

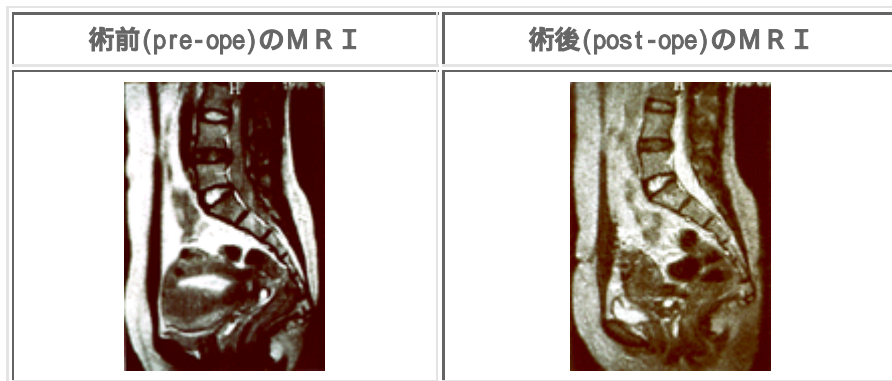
またクリニックにはこれから手術を受けられる方や術後の検診の方、遠く外国から診察を受けにこられる方などが頻繁に来院し、そういう時に「よかったら一緒にお茶を飲みませんか」と斎藤先生から声がかかります。おしゃべり好きの私たち？は、そのたびにいそいそと二階のリビングへの階段に挑戦するのです。

エアロビクスや水泳、ゴルフも一ヶ月もたたないうちに始めています

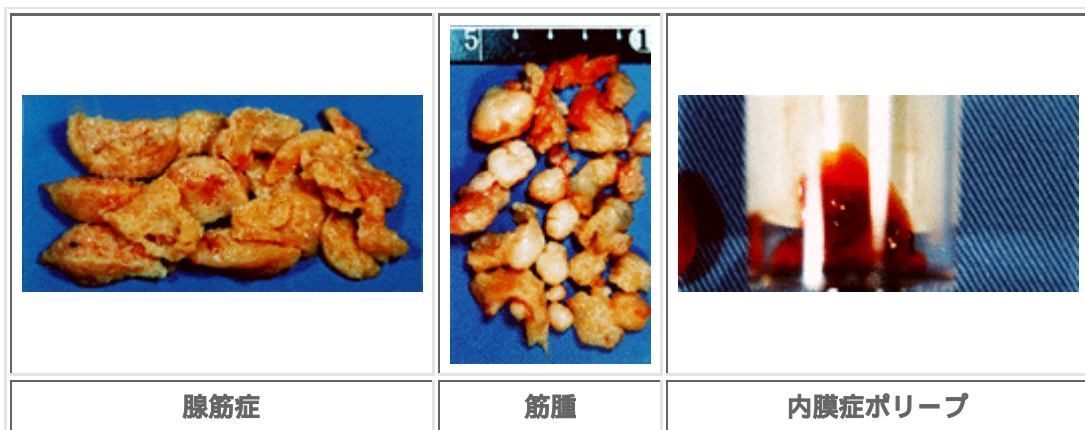
退院してから元の生活に戻るのそれぞれ個人差もあるのですが、私の場合は仕事がデスクワークでしかも職場が近くにあるということもあり、土曜日に退院して月曜日から出社しました。なんとかなるものです。心配なことがあるとまず、よき隣人だった宮部さんに電話をします。それで解決がつかないときはすぐに斎藤先生に電話かFAXで問い合わせました。先生はいつでも質問に答えてくださるのでとても安心できました。

そんな調子で回復も早く(年の割には)エアロビクスや水泳、ゴルフも一ヶ月もたたないうちに始めていました。そして、もうこないのではないかと危ぶまれていた生理も二ヶ月後に来ました。四ヶ月後の今では貧血もないせいか今までに経験したことのない元気な体になり恐いくらいです。

私は腺筋症だったのですが、手術前に先生が「この病気の人には手術するととっても元気になるよ」と言われていた言葉どおりでした。手術を受けてよかった、あの時、広尾メディカルクリニックの斎藤先生に出会えて本当によかったと思っています。



	術前(pre-ope)	術後(post-ope)
赤血球(RBC)($\times 10^4$ /ul)	273	512
血色素(Hb)(g/dl)	8.0	15.1
ヘマトクリット(Ht)(%)	23.6	45.8
備考	摘出物： 子宮腺筋症 30g 子宮筋腫 15g 内膜ポリープ 0.1g	



「ステロイド、慢性疲労症候群、そして子宮筋腫」

武石智香子（35歳）

子宮筋腫の発見は6年前

筋腫が見つかったのは93年の春。下腹部痛があって婦人科を受診したところ、最大直径で約7センチの筋腫が見つかり、「子宮が本来の2倍の大きさになっている」と言われました。「経過をみましょう」ということだったので、ほとんど気にしていませんでした。

私は米国・ハーバード大学の大学院生で、米国で主に暮らし時々日本に帰ってくるという生活を送っていましたが、筋腫が見つかった当時は日本にいました。

ステロイドの苦しみ

子宮筋腫が最初に見つかったのと同じ頃、まぶたの皮膚が腫れ、治りかけに固くなって目が開きにくくなってしまったということがありました。そこで近くの皮膚科にかかり、塗り薬をもらってつけ始めたのですが、これがステロイドの始まりでした。

塗り薬をつけているのに症状がどんどん広がり悪化していったことから、それが副腎皮質ホルモン、いわゆるステロイドではないかと疑いはじめました。それは、塗り薬を使い出して9カ月もたってからでした。心配になって医師に聞いてみたところ、薬の名前を覚えてくれないばかりか、「あなたみたいに医者にもものを言う患者は扱えない。お金は要らないから出て行け」と言われて、ひどく惨めな思いをしたものです。

ステロイドかもしれないのでもう薬を塗るのは止めようと思うのですが、止めてみると余計ひどくなってまた薬を塗ってしまう。その悪循環から抜け出せない状態が続きましたが、きっぱりと止める決心をしたのは、ステロイド克服の段階について書かれた本を偶然に本屋で手にとったことがきっかけです。そこに書かれていた症状が私の場合とまったく同じだったのです。

薬をいっさい使わないことにしたのは93年の12月で、クリスマスの頃には顔がぱんぱんに腫れて、いわゆるムーンフェイスになってしまいました。その後、黄色い汁が赤い顔から絶えず流れでて、夜の11時から2時頃まであまりの痒さに眠れない日々が続きました。

ステロイドからの離脱

ステロイドによる症状は皮膚ばかりでなく全身に表れました。体が冷たくて、朝の7時に起きてからどんなに動いても、夕方4時頃まで人間らしい温かみを体を感じないのです。体内を何も循環していない感覚に加えて慢性的な便秘にも悩まされました。その後、顔から出ていた黄色い汁は出なくなりましたが、代わって今度は病的なしわができるようになって、表情を変えたり瞬きをするだけでもパリパリするほどでした。

全て、ステロイド離脱期に経なければならない必要段階であるということを知らなければ、とても堪えられず、薬に戻ってしまったと思います。周囲も心配しますので、自信をもってやっていくことにもちょっと勇気があるのです。でも、これらの症状はすべてステロイドの患者さんが書いた本で読んだ通りで進んでいきました。

ようやく本来の顔でないにせよ「人間並み程度」に戻ったのは94年の夏でした。この間のステロイドの経過については日記と写真に残してありますので、いずれ自分なりにまとめてみたいと思っています。

その年の8月には再び渡米。決して体調が万全であったわけではありませんが、人心地もついたり、勉強も一応手についていて、体調の着実な回復を感じていました。

慢性疲労症候群」の始まり

ところが、95年の春、義母が入院したために一時帰国しました。飛行機の中から微熱を感じ、40日間、数日に一度だけの病院通いでしたが、ほとんど微熱が下がらず、風邪の症状が重くなったり軽くなったりを繰り返しました。義母が退院して病院通いが終わっても、電車に乗って駅を3つ、4つ行くだけでもう疲れてしまって、後で必ず熱が出てしまうありさまでした。それでもこれが病気だとは気づかず、単なる過労だと片づけていたのです。

95年の夏には米国内で短時間飛行機に乗っただけで、そのあと数週間微熱が続き、随分執拗な過労だと思いました。秋から冬、体調は最悪でした。秋は、週1回3時間の講義を受けるためにボストンの大学に出かけると、その翌2週間は微熱が出てしまいます。それでも意志の力を過信していた私は、体に鞭を打って勉強を優先していましたが、95年から96年の冬にかけては悪化する一方でした。

植物のような日々

しまいには20分以上座っていることも、字を書くことはおろか一行の文章を読むこともできなくなりました。集中力が続くだけのエネルギーがないのです。冬には、とうとう毎日ただ寝ているだけという生活になってしまいました。不安が募り、病気であることを自覚して、ドクターに予約を入れました。これはれっきとした病気だから自分の健康回復を第一に優先する、と決めました。第一優先にして初めて、体の方も応えてくれて、それが回復への一歩となりました。

いま振り返ると、あれはまるで植物のような生活だったと思います。お日様の力と水だけで生きている植物のように、私も日なたに寝て、いい水を飲むことだけを心がけて一日を過ごしていたのです。生活をできるだけ改善し、考えつく限りのあらゆることを試してみました。そのひとつにハリと漢方もありました。

病院での検査では、血液検査や尿検査の結果には特に異常はありませんでした。これは「慢性疲労症候群」の特徴です。その段階で「慢性疲労症候群」というものを病気として認め、示唆してくれる先生に巡り会えばとてもラッキーなのですが、私の場合、残念ながらそうではありませんでした。アメリカでは、既存で解明されている検査数値の異常以外は異常として認めないことが多く、「日本では、自律神経失調症という言葉があるほど、医学は進んでいる」という書き方をする人がいるぐらいです。隣の芝生は青く見えるものです。

効果があったハリと漢方

ハリと漢方はすぐに効果があって、たちまち便秘は解消し、外出後の微熱の期間も除々に減ってきました。少しずつ、薄紙をはがすように回復してきて、96年の夏にようやく読書ができるようになりました。このときの嬉しさといったらありませんでした。本が読めない状態の辛さ、悲しさを味わったからこそ、本を読める喜びがひとしおだったのだと思います。

読書ができるようになって、慢性疲労症候群について書かれた本を読み、私の症状はおそらくこれだろうと思いました。慢性疲労症候群というのは、何らかの理由で免疫系が弱っているときにウイルスに侵食されると、慢性的に体内にウイルスがいる状態になる病気のように、私の場合はステロイドが原因で免疫系が弱っているところに通院で風邪を引いたのが引き金になったのではないかと推察しました。風邪が引き金で慢性疲労症候群になる人が多いということも知りました。私もその一人だったのです。

後に書くように、広尾で手術をしたいという夢を持っていた私は、中国人のハリと漢方の先生に、帰国して手術が受けられるようになるまで体力を回復したい、その間筋腫の成長をとめたいと説明し、できるだけのことをして下さいとお願いしたのです。そして、その通り、それから定期的に子宮筋腫のサイズを検査しましたが、それまでかなりのスピードで大きくなっていった筋腫が、ハリと漢方を始めてから成長が全くとまってくれたのです。

広尾での手術に向けて体調回復

病院での検査時に婦人科にも回され、ここで超音波で筋腫が大きくなっていることが判明しました。最初に筋腫が発見されたのが93年の春ですから、ステロイドや慢性疲労症候群に苦しんでいた3年の間に、筋腫もどんどん成長していたことになります。

ドクターには手術を勧められました。保存手術をしてくれる、という話でした。いったんは「では年内に」ということになったのですが、夏に慢性疲労症候群の本を読んで、手術をすることは慢性疲労症候群を致命的に悪化させることを知り、これを理由に手術は延期したいと説明し、ドクターもこれを受け入れてくださいました。と同時に、同じ保存手術をするにしてもぜひ広尾で、という気持ちもあったのです。体力をつけて、日本に帰って斎藤先生の手術が受けられる状態になるのを待ちたかったのです。

広尾の斎藤先生のことは、筋腫の手術という話になってから、母や友人が送ってくれた資料で知りました。母は婦人雑誌の記事を手がかりに広尾に連絡をとり、当時の広尾の一連の紹介記事をコピーしてまとめたものを送ってくれました。私はそれらに目を通した段階で、斎藤先生の手術法の説明の明確さや哲学に強い感銘を受け、ぜひ斎藤先生の手術を受けたいと思いました。他の知り合いもパソコン通信を通じて過去の新聞や雑誌の記事を送ってくれましたが、その中に広尾についての掲載記事があることも私の目を引きました。

友人の知り合いに広尾で手術を経験した人がいることも分かり、国際電話をしてみると親切に教えてくれました。ですから、アメリカにいたころに、すでに頭の中では「ぜひ斎藤先生に」と思い込んでいたのですが、実際にはどんなペースでいつまでに帰国できるほど体力が回復するのか皆目見当がつかない状況でした。

先生にもしものことがあったり、急に引退されてしまったりしたら私はどうしたらよいのだろう、と不安でたまりませんでした。

ようやく体力に自信を取り戻して、帰国して広尾を訪れたのは98年の夏です。帰国して、翌日に美容院、翌々日、時差もまだ治らぬまま斎藤先生を訪ねました。あらかじめ、既に日本に居た連れ合いに予約を頼んでいたのです。資料から想像していた通りのユニークな先生でした。最初は反対した両親も、実際に先生に会ってみてMRIの説明などを受けると、「どうぞうちの娘をお願いします」ということになりました。そして、予約できる一番早い日を手術日に選びました。

アメリカでの不安な長い日々への手術ですから、今から思い出しても、先生がお元気でいて下さって、広尾で手術を受けることができ、本当に私は幸運だったという思いは人一倍強いのではないかと思います。

「慢性疲労症候群」への周囲の理解の重要さ

いつかは治るはず、と信じて慢性疲労症候群と長い間つき合ってきましたが、植物状態の日々のなかで一番辛かったことは、常に活動し、目標を達成していくことに価値を置くアメリカ社会で、何ひとつできずにいることだったかもしれません。

フラストレーションばかり膨らんで、連れ合いについ当たってしまったりして迷惑をかけたこともたくさんありましたが、それも本によると病気の一環です。彼は私の努力を見ているうちに、だんだん理解を深めてくれ、精神的に支えてもらえるようになって感謝しています。

家事もずいぶん負担をかけてしまいました。だいぶ回復してからも、食後は心臓の裏側が痛くて、後片づけに立てない私に代わって、彼が台所仕事してくれました。彼の方にこそフラストレーションがたまっていたと思うのですが、4年あまりの間の私の状態をつぶさに見ていた連れ合いは、私にとってかけがえのないパートナーだという思いを強くしています。

「慢性疲労症候群」にとって周囲の理解はとても重要ですが、なかなか理解を得られにくいのも事実です。「慢性疲労学校」は、たとえその後2週間熱が出るとしても、この外出には価値がある、この人と逢って時を過ごすのはそれだけの意味がある、という覚悟で生活していく習慣を学ぶ学校です。そして、実際、友人と過ごす時間はたいがい覚悟しただけの価値はあるのです。

しかし、そこで「思ったより元気そうで安心した」と言われることには、やはり辛いものがあります。「思ったより元気そう」というのは、いかなる病気の患者に対しても禁句なのだそうですが、みかけは全く病気に見えない「慢性疲労症候群」の患者はその言葉に特に心を引き裂かれる思いがするものなのです。

体験者の一言に励まされて

「風邪」と聞けば、くしゃみ、鼻水、鼻づまり、頭痛、発熱、咳、痰がでるのね、とわかるように、「慢性疲労症候群」（もっとよい名称に近いうちに変わるのではないかと思います）と聞けば、ああ、それは、何もできなくなって、生活に支障があって、社会生活は消えて、生きていてもただ家族の負担になるだけで、それで家族とも難しくなって、鬱病ようになって、死にたくなるのよね、と当たり前のように知っている人が一人でも増えるとよいと思います。

私には「慢性疲労症候群」になったことがある友人がたまたまいました。当たり前のように「ああ、私もその頃死にたかった」と言ってくれて、救われました。その友人が生きていてくれて私が今助かっているのだから、私も今は何の役にも立たないけれど、どうにか生きていかなければいけないな、と思ったのを覚えています。

その同じ友人が、婦人科の手術後のひと冬は難しいものだ、と教えてくれました。私は夏に手術を受けて、直後はとても順調だったのですが、暖房を入れる秋ぐらいから急に体調が悪くなって、苦労していたところだったのです。ステロイドの時もそうでしたが、経験者の話を聞いて、こういうものだ分かっているのといないのとでは、同じ体験でも主観的な辛さは全く違うものです。辛かったことを辛かったそのままに人に伝えていくというのは、とても大切なことだと思っています。

戻ってきた免疫力

つい先週、ご多分に漏れずはやりの風邪を引いたのですが、いきなり38度以上の熱が出ました。すると、連れ合いが「快挙、免疫力が戻ったんだね」と言って一緒に大喜びしてくれました。いままでどんなに風邪を引いても老人のように37度前後の微熱しか出ず、したがって治るのに何週間もかかっていたのを横で見てくれたからこそ、こうやって喜んでくれるのです。大変助かります。

他に劇的な変化といえば、食後に決まって表れていた心臓の裏側の背中への痛みが手術後きっぱりなくなったこと。座り続けているのがとても楽になってきたこと。緩慢ながら着実によくなっていることは、休めば確実に疲れがとれるようになってきていることでもわかります。

でも、博士論文に取り組むプレッシャーでそうそう休んでばかりもいられないのが辛いところです。やりたいこともたくさんあるのに、他人よりまだ疲れやすく、今は論文以外は身動きがとれません。その本業の方も今ががんばりどころなのに、まだ全く無理が利かず、思い通りにならないことにフラストレーションを感じそうになります。その度に「長い間かかって悪くした体なら、回復にもそれだけの時間が必要なのは当たり前」という斎藤先生の言葉が浮かんで来て、「そうそう、当たり前だ」と思います。

最後に

私は本来大学院生ですが、私にとってここ6年の間は本業の大学院よりも、2年間の「ステロイド学校」、4年間の「慢性疲労学校」からのほうがより多くのことを学んだ気がします。残念ながらまだ手術後半年の現時点では、「慢性疲労」学校は卒業したとはいえ、「子宮筋腫の手術で全てが克服できました」とご報告できるまでにはあと2年ほど頂きたいと思います。

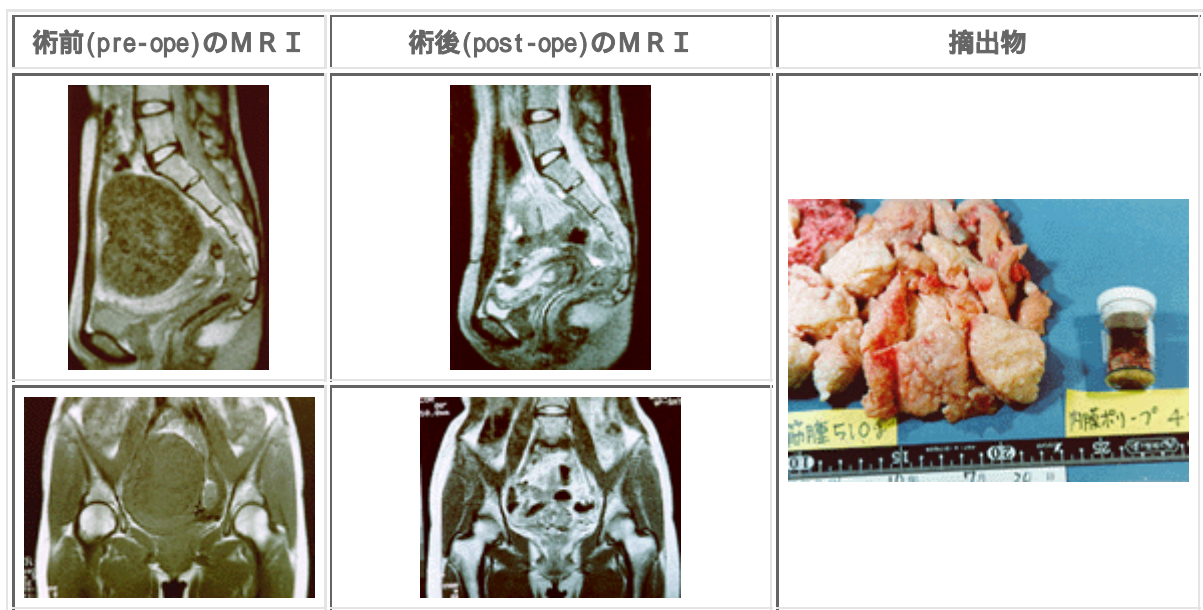
私がいま、できるだけ多くの方におくりたいメッセージは3つです。

1. 本来怠け者でないはずなのに、なんだか最近ぐったりして力が出ないという方は、試しに子宮の疾患も疑ってみて下さい、ということです。実際、統計的にも「慢性疲労症候群」と一般に呼ばれる症状のある人は、女性が多いそうです。
2. 過去何らかのホルモン関係の薬を使った人も、子宮のチェックは定期的にした方がよいかも知れません。

3. 「経過をみましょう」といわれた皆さん、ぜひ気をつけて下さい。私もその時にすぐ処置をしておけば、ずっと簡単だったのです。その言葉は、子宮筋腫の患者に共通して言われる決まり文句です。実際には、経過を見てもどうにもならない、大概悪くなるだけなのだと分かったのは、斎藤先生のところで他の患者さん達と話をしてからです。多くの方が、経過を見ているうちに、手がつけれないぐらいに成長し、駆け込み寺のように斎藤先生に助けをいただくこととなります。

最後になりましたが、入院中は斎藤先生と看護婦さん、スタッフ全員が大変親切で、患者の身で不謹慎ですが、とても楽しい一週間を過ごすことができました。アメリカでは「日本に帰ったら、とにかくまず手術をして、それから日本の美味しいお魚を食べるのだ」というのが私の夢でした。その夢が、入院している一週間のうちになんと2つとも叶えられてしまうとは思ってもいませんでした。

広尾の皆さん、本当にありがとうございました。



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)($\times 10^4$ /ul)	458	453
血色素(Hb)(g/dl)	14.5	14.1
ヘマトクリット(Ht)(%)	42.2	41.4
CA-125	59	25
備考	摘出物： 子宮筋腫 510g 内膜ポリープ 4g 病理：良性	